



特集

# 緑がラリーの明日を支える

～カーボン・オフセットラリーが国内初開催。その未来に見えてくるものとは何か～



競技中に排出されたCO2を環境保護への取り組みでオフセット(相殺)する

カーボン・オフセットラリーはすでにWRCでも実施され、

モータースポーツ界でも認知が高まりつつある。

そして日本でもこの4月、北関東を舞台にカーボン・オフセットラリーが初めて開催された。

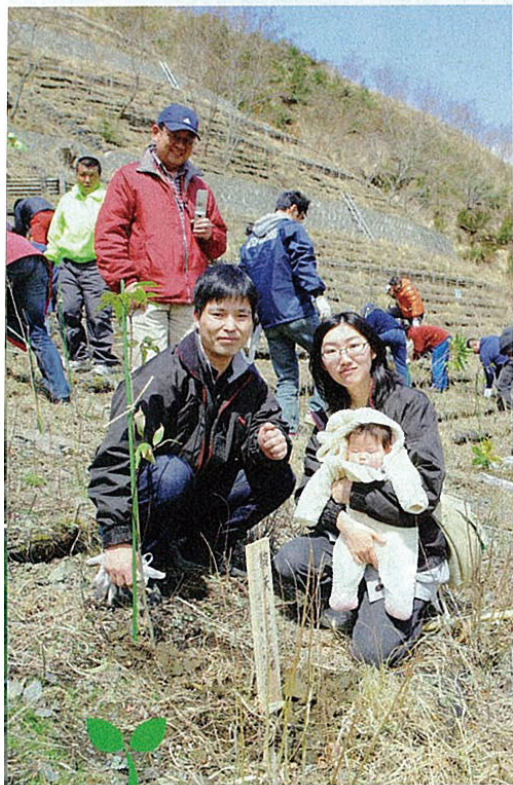
モータースポーツとECOとの関係が問われるいま、

このイベントの持つ意義は決して小さくはないはずだ

フォト/関根健司 レポート/JAFスポーツ編集部



参加者達は急峻な山肌を切り拓いて設けられたスペースに樹の木を植樹した。作業の前には「足尾に緑を育てる会」のスタッフによる適切なアドバイスが行われたこともあって、各選手とも決して柔らかくはない土壌への植樹をスムーズに終了。その数、100本。5年後またこの地で行われたラリーでその成長の姿をぜひたしかめてみたい。



4月の第1土曜日、今年のJMRC群馬ラリーシリーズが群馬・栃木両県を舞台として開幕した。スタート会場となったのは栃木県日光市足尾町の松木溪谷。松木地区はかつて日本の製錬産業の中核を担った足尾銅山の拠点として繁栄した街だ。

受付を済ませ、車検が終了したラリーの参加者たちは、開会式とドライバーズブリーフィング出席のため、足尾の山々に囲まれた松木溪谷を臨む高台へと移動した。だが残念ながら、その山々には緑が見受けられない。かつて世に広く知られた足尾銅山の煙害によって失われてしまったのだ。

開会式が始まり、関係者の挨拶、競技役員の紹介へと進み、ブリーフィングへ。ラリーの注意点の説明とひと通りのスケジュールの説明、そして質疑応答が終わって無事ブリーフィングは終了した。しかしそのあと選手達が向かった先は、競技車の待つパドックではなく、ブリーフィング会場の背後に聳（そび）える急峻な山肌。

見るといつのまにか軍手をはめた両手には、苗木と鍬がしっかりと握られている。中には応援に来た家族や恋人と一緒に山を駆け上がっていく選手の姿もチラホラ。何か、皆、楽しそうだ。普通、記念の植樹というものはお偉いさんが来て背広姿と斧という恐ろしくミスマッチな出で立ちで行うのが定番。だが今回はちょっと趣が違いすぎる。

硬い土とゴツゴツした石と格闘すること、およそ30分。汗だくになった選手たちが植えたのは1本の樹の木だ。しかしこの小さな木が5年後、選手たちがこれから臨むラリー競技で排出するCO2を吸収してくれるのだ。ラリーストたちによるカーボン・オフセットに向けた草の根の試みは、こうして無事、完了した。

足尾町ではいま荒廃した山に植樹を行い、緑を回復する活動がNPO法人「足尾に緑を育てる会」によって行われている。同会は国土交通省と連携し、学校や企業等の団体による体験植樹を受け入れており、その数は年々、増加する一方だという。「足尾の山に100万本の木を植えよう」の合言葉は一步一步たしかかな前進を続けている。今回のJMRC群馬ラリーシリーズの植樹体験もその一環として行われたものだ。

なぜ足尾の緑とラリーが結び付いたのか。その橋渡し役となったのは、先ごろ亡くなった作家の立松和平さんだった。ダカールラリーや香港〜北京ラリーへの参戦などモータースポーツ好きの作家としても知られた立松さんは様々なラリーでコ・ドライバーとして活躍したが、その中で知り合った一人が、1994年WRCオーストラリアラリーでコンビを組んだ群馬在住のラリードライバー、高桑春雄さんだった。

高桑さんはその後、地元群馬でラリーの振興に努める活動に取り組み、本誌でも以前紹介したNPO法人群馬ラリーネットワークの設立に関わったほか、地域という枠を超えてモータースポーツの振興を図るNPO法人MOSCO（NPO法人モータースポーツコーディネイト）を立ち上げた。MOSCOは現在、本州で唯一のスノーラリーとして知られる「BICCスノーラリーイン嬬恋」の開催のバックアップのほか、雪上運転講習会などを行い、モータースポーツの社会貢献活動に取り組んでいる。

一方、立松さんは、足尾の鉍毒問題を国会で告発した田中正造に関する本を出版するなど、故郷でもある栃木県のこの問題に早くから関心を寄せた活動を行い、「足尾に緑を育てる会」の創設にも関わった。立松さんの紹介で「足尾に緑を育てる会」を知った高桑さんも活動に参加を始め、現在では同会とMOSCOは提携関係を結んでいる。

同会の最も大きな定例イベントである4月の植樹デーにはMOSCOのメンバーが交通整理等の形で協力を行っている。なお、この「足尾に緑を育てる会」には毎年、足尾地区でラリーを開催しているJAF公認クラブ、マツダスポーツカークラブのクラブ員も協力している。

「今回の件は順番としては植樹が最初にあったわけではなくて、まずは群馬シリーズを増





やせないだろうか、という所から実は始まった話なんです。足尾の方々からもっとラリーを開催してくれ、という要望が以前からあったので、じゃあ僕が所属するクラブである上州オートクラブとMOSCOで一戦できないものだろうか、と。足尾でやれるならカーボン・オフセットができないかという流れですね。環境保護に通じるモータースポーツの社会貢献というのは常々、MOSCOの活動として考えていたからです」(高桑さん)

カーボン・オフセットは、経済活動や生活によってある場所で排出されたCO2に代表される温室効果ガスを、別の場所で植樹・森林保護などを行うことによってオフセット(相殺)することをいう。国内ラリーにおいて、最初にこの言葉が注目されたのは2008年のAPRCの一戦、ラリー北海道だ。

このラリーにおいて三菱自動車は、三菱車が排出するCO2を、翌年のダカールラリーの開催地であったアルゼンチン・パタゴニア地方の風力発電事業で削減されたCO2でオフセットする試みを行った。具体的にはラリーベース車1台の全ラリー行程で排出されるCO2を換算し、それをパタゴニアの風力発電事業で削減されたCO2を排出権として購入することでオフセットを行ったのだ。趣旨に賛同したエントラントは排出権の購入費用の一部を負担するという形でカーボン・オフ



足尾の山々は着実に緑化が進んでいる。本文で紹介した植樹デーのほかにも、「夏の草刈デー」、「足尾グリーンフォーラム」、「秋の観覧会」といったイベントが開かれている。また作業デーや各団体・学校を対象とした体験植樹会も行われている。詳細はホームページ<http://www.ashio-midori.com/>で。このHPの製作はMOSCOが行っている。

セットに協力した。

今回、高桑さんは植樹の前にひとつのデータを例にとって参加者に説明した。それによれば植樹する樹の木1本は5年後に94kgのCO2を吸収する。これはおよそ1500ccの国産の2BOX車が580km走行して排出する量に相当する。しかし言うまでもなく、これはあくまで通常走行を前提とした話である。

今回のラリーは総走行距離285kmの内、約48kmは全開で走るSSが設定されている。

現状、全開走行時のCO2排出量に関するデータは存在しないので、あくまで目安としての話になると断った上で、高桑さんは軽自動車なら十分にオフセットできるだろうが、1500cc程度の中排気量車でトントン、2リッターターボ4WDでは追いつかないだろう、と語った。

ただし今回は参加者のほかにも、ラリーの関係者も植樹を行ったので植えられた樹の木は100本に及んだ。排出したCO2が9400kg



## “木を植えるって、楽しいね”。日頃、土には慣れ親しんでいるはずのラリーストたちが口を揃えた

の枠の中で収まれば、今回のカーボンオフセットは完了する計算だ。

「本当は燃費の悪いクルマに乗ってるクルーには3本とか4本とか植えてもらわないといけないでしょうね(笑)。僕の実感としてはカーボン・オフセットに近づけたかなという感じですね。

でも、皆が思ったより楽しくやってくれたことが何より嬉しかったですね。皆やっぱり多少はこういう環境への意識があったんだなと思いました。これを機会にさらなる理解につながってもらえればいいですね」と高桑さんは語る。

植樹と聞いて「正直最初は“かったるい”と思った」というある参加者は、「はじめは小石を掻き出しながらラリーに備えて全開で踏んだらパンクする石と大丈夫な石を見極めてたんですが(笑)、気が付いたら楽しかった。やっぱり自分で体を使って樹を植えるという体験をしたことでカーボン・オフセットという聞き慣れない言葉がグッとイメージできるようにしました」と語った。

「でもやっぱりひとつのラリーで出されるCO2の吸収に5年かかる、というのは驚きでしたよね。CO2を撒き散らしてっていう意識は特に4WDターボに乗ってる連中は、多分、皆、心の中にある。それを数字で確認できたというだけでも意義のあるイベントだったと思います」とあるベテランナビゲーターは振り返った。

森林が国土の7割を占める日本においては、国内ラリーは現在、そのほとんどが緑豊かな山間地を舞台にして行われている。オーガナイザーは林道の清掃などを通じて地域社会と良好な関係を築いているが、今後「緑」がテーマになってくる可能性はあるかもしれない。今回のように植樹というような形が取れない場合は、前述の三菱自動車のような排出権の取引や、また森林事業へのチャリティー(寄付)といった形でのオフセットを行うことは可能だ。

「ただできるなら、やはりお金をただ払ったという形じゃなくて、今回のように体を使っ

て実感できる取り組みの方が意識も高められる」とある参加者はいう。国内ラリーは、地元自治体と緊密な連携を取り合っているケースがほとんど。相互交流&理解という意味でも体験的なオフセットの形がたしかに望ましいかもしれない。

高桑さんは現在、そうした自治体とのより強固なコラボレーションが組めるモータースポーツ推進機構の創設に関わっている。「いまはモータースポーツとそれが環境面で生むマイナスをどうオフセットしていくかという話を一体化して進めていくという感じです。だから植樹などの話も企画している。そういう取り組みが今後は当然のように求められる時代になってくると思いますね」

ハイブリットカーの参入など、新たな動きも期待される国内のモータースポーツ界。ただしクルマが変わるだけで状況が劇的に変わるというわけでもなさそうだ。モータースポーツを多方面に新たにプレゼンしていく上で、「環境」は必須項目。そんな時代がもうすぐそこまで来ているのかもしれない。



# 激戦区Bクラスは濱井義郎インテがぶっちぎり!

JMRC群馬ラリーシリーズ第1戦 カーボンオフセットラリー [JAF公認No.2010-1104]

開催日: 4月3~4日 開催場所: 栃木、群馬 格式: 準国内 主催: J.A.C [クラブ登録No.加盟10003]  
 フォト/関根健司 レポート/JAFスポーツ編集部

2010年のJMRC群馬ラリーシリーズが4月の第1週、栃木、群馬の両県を舞台とする「カーボンオフセットラリー」で開幕した。群馬の老舗クラブとして知られる上州オートクラブが群馬戦は久々となるオーガナイズを担当した。

栃木県足尾町の松木溪谷をスタートとしたラリーは、まずレッキ的な意味合いの強いローアベレージのセクション1を走り、夜の訪れとともにSSが待ち受けるふたつのセクションに挑む。SSの舞台となったのは3カ所の林道で計7本。ラリーの進行とともに、サービスは足尾銅山観光駐車場、みどり市草木ドライブインと南下し、最後はわたらせ溪谷鉄道水沼駅の温泉センターでフィニッシュという設定だ。

4月とは言え、夜は氷点下に入る寒さの中での開催とあって、SSはリスクな下りは避けて基本的に上りオンリーの設定。しかし残念ながら7台のマシンがリタイアに追い込まれた。

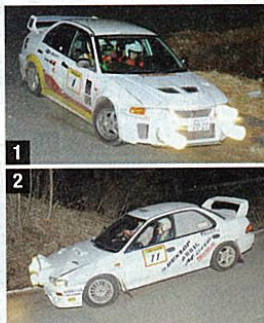
Aクラスは昨年、復帰1年めで群馬戦チャンプを獲得した遠藤政幸/藤波誠一組が「クロ

スミッションではないのでギア比的にキツかった」と言いながらも全SSでベストを奪い、貫録勝ち。「タイヤが大きい分、路面が悪い所では有利だったかもしれません」と勝因を振り返った。

シティ同士による2位争いは栗原智子/平井孝文組が森岡次郎/伊藤克美組の猛追を0.9秒の僅差で振り切っている。

Bクラスは新潟から参戦の濱井義郎/白水順一組が7SS中、6本でベストを奪う快走を披露、総合でも2位に入る速さで優勝した。昨年は使用できるタイヤに制限のない中部・近畿地区戦にスポット参戦していたとあって「ラリータイヤでのラリーは久しぶりだった」という濱井選手。

「今年は新潟は雪が多くてなかなか走る機会がなかったんで肩慣らしのつもりで参戦しました。でも、いい所で踏み切れなかったりとちょっと走りはイマイチでしたね。距離が走れて楽しいので群馬戦も機会があればまた出たいと思います」とラ

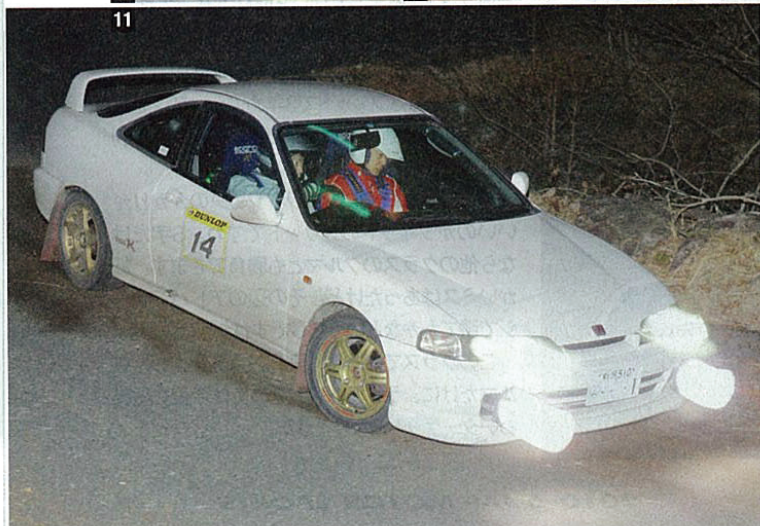


1.中村一朗/迫田雅子組はCクラス3位入賞。2.原靖治/松下敏之組はCクラス4位入賞。3.昨年のあさ美の一戦に続く勝利を飾ったCクラス田村哲也/中島優組ランサー。

リーを満喫した様子だった。

13台が参加したCクラスは千明正信/須藤栄一組のインプレッサが5連続ベストと他を圧するスピードを見せるが、SS6でマシントラブルからリタイア。代わって首位に立った田村哲也/中島優組が最終のSS7をぶっちぎりのベストで締め括って優勝を飾った。田村選手は濱井選手と同じ準加盟クラブ、レーシングチーム雪樺の所属。新潟勢が2クラスを制覇した形だ。

「千明さんのリタイアは知らなかったんで、優勝は無理でも走り切ろうと最後まで落ちない程度にプッシュしました(笑)。昔、石を踏んでドラシャが折れたことがあるので、落石には特に注意して走りましたよ。何より濱井選手に負けなくてホッとしています(笑)」と、チームメイトとのクラスを超えたバトルを制したこと(!?)、最後は安堵の表情を見せていた。



4.Aクラス入賞の皆さん。5.Bクラス入賞の皆さん。6.Cクラス入賞の皆さん。7.Bクラス5位入賞の大川学/山田真記子組。8.Aクラス3位入賞の森岡次郎/伊藤克美組。9.佐藤孝太/工藤謙次組はBクラス4位入賞。10.Aクラスは昨年のチャンプ遠藤政幸/藤波誠一組が優勝。11.Bクラスは昨年、中部近畿地区戦で腕を磨いた濱井義郎/白水順一組インテグラが快勝した。12.Cクラス2位入賞の青藤猛/神作千鶴子組。13.菊地典夫/田巻明宏組はBクラス2位入賞。14.Bクラス3位入賞の秋浜勉治/中村尚子組。15.Aクラス2位入賞の栗原智子/平井孝文組。